

研究ノート

「ガーダー・メイレン蜂起」に関する一考察

——『盛京時報』、『東三省民報』を中心に——

A Study of the “Gada Meiren Uprising”:

Focusing on *Shengjingshibao* and *Dongsanshengminbao*

包 宝 海

(東京外国語大学大学院)

BAO Baohai

(Graduate School, Tokyo University of Foreign Studies)

目 次

はじめに

1. 蜂起の歴史的背景

2. 戦闘の過程

2.1. 蜂起の勃発から1930年の秋まで

2.2. 1931年の1月から蜂起が弾圧されるまで

おわりに

はじめに

本稿では、「ガーダー・メイレン¹⁾蜂起」という出来事を取り上げ、その歴史的背景を概観した後、蜂起前後の展開を明らかにすることを課題とし、それにどのような歴史的意味があるのかについて考察する。

ガーダー・メイレン (Gada Meiren、1892～1931、漢語表記は嘎達梅林[Ga Da Mei Lin]) の本名は、ナドミド(Nadmid)、漢名孟青山(Meng Qingshan)及び孟業西(Meng Yexi)という。「ガーダー」は末子という意味の漢語である。彼は家族の中で末子として生まれている。「メイレン」は官職を指しており、満州語では旗兵隊の最高統領という意味になる²⁾。ガーダー・メイレンは1892年にホルチン左翼中旗のウンドゥル王の領地であるタブンゲル＝ノトクのジャムントハイ(Jam-un toqui)という村で生まれた³⁾。彼は1929年末から1931年代初頭まで、内モンゴルのホルチン地域で、漢人農民による過度な農地開墾に反対して武装蜂起を起こし、1931年3月30日に熱河省派遣の李守信の部隊によって鎮圧され、戦死した。

「ガーダー・メイレン蜂起」に関する先行研究や、各資料の記述では、ガーダー・メイレンが「開墾に反対し、王公と対立し、奉天派軍閥の軍勢と戦った」という点で合意が見られるが、彼が「ど

のような人々と」「何のために」戦ったのかについての見解はそれぞれ異なっている⁴⁾。中国で書かれたガーダー・メイレンに関する伝記の中には、ダルハン旗の貧しい一般庶民のほか、ホルチン左翼後旗、同前旗、ゴルロス旗、双山県から来た地元の漢人匪賊団も「蜂起軍」に加わっていたと書かれている⁵⁾。また、「ガーダー・メイレンは蒙漢人民の共同の利益のために戦った」⁶⁾とされており、「蜂起軍が各地のモンゴル人と漢人に歓迎され、長嶺、双山一帯の漢人からの銃と弾薬などの援助を得ていた」⁷⁾と書かれている。これに対して、日本で発表された論文や記事の中では、「彼は蒙地開墾に対抗し、モンゴル遊牧民のために戦った」⁸⁾、あるいは、「蒙地開墾を巡ってモンゴル人と漢人の対立的な構造があった」⁹⁾と指摘されている¹⁰⁾。

一方、これまでの先行研究では、蜂起軍の行動についてある程度記述されているが、蜂起前後の展開や戦闘の過程、蜂起軍の規模、メンバーなどについて不明な点が多い。

本稿ではこのような問題意識を持って、ガーダー・メイレンに関する先行研究ではほとんど使われていない奉天で刊行された『盛京時報』、『東三省民報』などの新聞を参照しながら、「ガーダー・メイレン蜂起」の歴史的背景について概観した後、戦闘の過程、とりわけ、蜂起が弾圧される数ヶ月前の出来事について詳しく検討することにした。

但し、本稿では、新発見の新聞記事からわかったことのみを中心に扱う。新聞は発行側の主張や国の政策を宣伝する目的で出版されたものが多く、そこに多くのバイアスがかかっていることはいまさら言うまでもない。しかし、新聞の世論に及ぼす影響力は多大である。本稿で取り上げる『盛京時報』は1906年10月18日から1944年9月14まで、日本人によって奉天で刊行されていた漢語新聞である。当新聞では、当時の中国の内政、外交、経済、軍事、社会情勢などを含む重大な事件が詳しく報道されており、それは、中国現代史、国際関係史、とりわけ、中国東北史研究では基本史料として使われている。また、『東三省民報』は張作霖と張学良の資金援助を受け、1922から「東三省民治促進会」によって奉天で刊行されていた中国人経営の漢新語新聞であり、当時の社会情勢を反映する重要なメディアだと思われる。本稿では、これらの新聞を用いることで「ガーダー・メイレン蜂起」の再構成を試みた。

1. 蜂起の歴史的背景

清朝政府はモンゴル地域に対して、長い歴史にわたって漢人の入植を禁じる「封禁政策」を取り、モンゴル旗地の開墾を強く禁じていたが、その背景には常にモンゴル王公の私的招墾という事実があった¹¹⁾。ところが、清朝末期から実行された「移民実辺」（移民を持って辺境を充実させる）政策により、多くの漢人がモンゴル地域へ入植してきた。一方、一部のモンゴル王公たちは北京などの大都市の贅沢な暮らしに染まって中国の商社に借金をかさねていた¹²⁾。彼らはその借金を返済するために、蒙地開墾の潮流に乗じて、開墾作業を推し進めたのである。

「ガーダー・メイレン蜂起」の舞台であったホルチン左翼中(ダルハン)旗は、1636年に設置され、その面積は33510平方キロメートルで、清朝初期のホルチン諸旗の中で最大の旗の一つであった。しかし、ホルチン左翼中旗の歴代の蒙地開墾¹³⁾を通じて、1929年になると、その面積は18114平方キロメートルまで縮小し¹⁴⁾、総面積の46%が開墾された。残されたのは遼北荒および西夾荒と呼ばれる

新開河流域と北部の砂漠、山岳地帯のみであった¹⁵⁾。ここでは歴代の蒙地開墾の被害を受けて移住してきたモンゴル人も多く生活していた。したがって、この二つの荒地の開墾はホルチン左翼中旗の存続と滅亡に関わる問題であり、しかも、モンゴル人の生計に関わる問題であった¹⁶⁾。

1929年2月から遼寧省(同年奉天省から改称)側による遼北荒と西夾荒の開墾が始まり、土地測量が強制的に行われた。同年3月に、ガーダー・メイレンはダ・ラマなどの人たちと協議して、「遼北荒」の中心地であるシェブルト(舍伯吐)やゴルバンマンハ(古爾本芒哈)地域で「約500人の民衆が参加した」モンゴル人の反開墾会議を開いた¹⁷⁾。この会議では趙瑞堂、ガーダー・メイレンなど5人を代表とする60人規模の代表団(反開墾請願団)が選ばれ、奉天へ向かい、ダルハン王と省側に請願した¹⁸⁾。しかし、彼らの交渉は失敗した。

8月30日夜、遼寧省警察庁は、代表者である4人を宿泊先の旅館で逮捕し、奉天で一ヶ月近く拘留した後、ホルチン左翼中旗の印務処牢獄に送還した¹⁹⁾。同年の12月13日の夜、ガーダー・メイレンの妻ムーダンは養子のアムルリンゴイ、下僕のセレンゲー、ドンロブなどを含む7人を組織し、武器などを持って牢獄を襲い、ガーダー・メイレンを救出した²⁰⁾。この日から蜂起がはじまったのである。

2. 戦闘の過程

2.1. 蜂起の勃発から1930年の秋まで

脱獄したガーダー・メイレンらはダルハン旗から離れて北の洮南へ向かい、1月にはホルヒン寺(quraq-a-yin süm-e/胡力罕蘇木廟)で集会を開き、開墾に反対し、民衆の土地を守るといふ蜂起の目的を宣言し、民衆と共に戦おうと呼びかけた²¹⁾。一か月後、蜂起軍は当初9名から40、50名、さらに200名あまりに増えた²²⁾。彼らは「測量局を打倒し、民衆の財産を奪わせない」²³⁾(図1)というスローガンをうち出し、遼寧省側から派遣されてきた遼北荒と西夾荒地の開墾軍を攻撃し、測量道具、帳簿や契約書などを焼いた。



図1 「ガーダー・メイレン蜂起軍のスローガン」

1930年の4月中旬ごろ、ガーダー・メイレン蜂起軍がホルチン左翼中旗シェブルト一帯で、墾務局の「総辦」韓色旺をリーダーとする数十人の測量軍を攻撃し、9人を殺し、5人を捕虜にした²⁴⁾。その後、蜂起軍が同旗のホワトゴル(Quwatuγool/花吐古拉)、ジャムト(Jamtu/架瑪吐)、ウランホワ(Ulayanquwa/烏蘭花)などの地域で、旗兵隊及び開墾軍と小規模の戦闘を何回も繰り返した²⁵⁾(図2)。

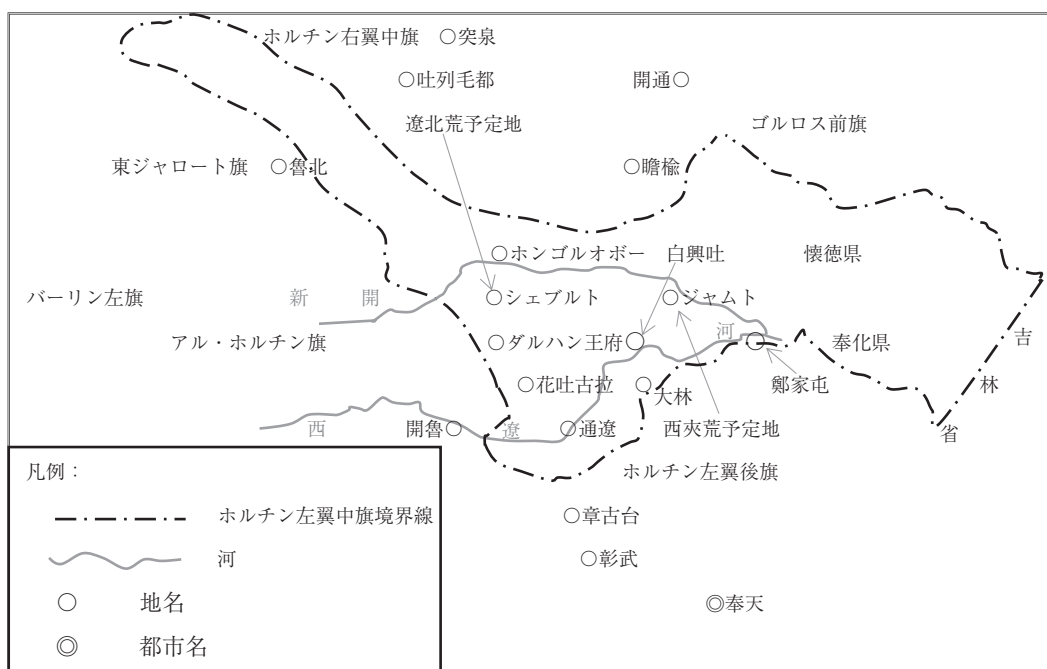


図2 ガーダー・メイレン蜂起軍当時の地域名の配置図

同年5月5日から12日にかけて、蜂起軍は通遼県の北から140里余り(70キロ)離れているモンゴル荒地、煙能吐²⁶⁾付近で、農業に従事する漢人を攻撃し²⁷⁾、5月下旬にはホルチン左翼中旗開墾地域内のモンゴル人を動員して西夾荒一帯で測量作業を妨害させたが、陸軍騎兵第7団の追撃を受けたために、北部山岳地帯を拠点として反開墾活動を展開するようになった²⁸⁾。この時点では、蜂起軍の規模は150余人であると報じられており、蜂起軍の主要なメンバーとしては、ガーダー・メイレンと洪順²⁹⁾、天紅、高山、満天紅の名前が挙げられている。

当時の新聞記事から1930年8月中旬ごろの蜂起軍の活動の様子を確認できる。

【資料1】『盛京時報』1930年8月12日、(第7408号)

昨日、開通に駐屯する騎兵第5団長の劉茂儀は第1と第2の二つの中隊を率いて、匪賊討伐に出発した。瞻榆西南へ向かい、ダルハン旗まで追撃し、黄河の開保というところで、有名な疙疸米里[ガーダー・メイレンー引用者注、以下同じ]匪賊団と遭遇し、約百名余りの匪賊がいた。〔中略〕今回の討伐では、7名の匪賊と3名の人質が捕虜にされ、7挺の歩兵銃と多くの驛馬が鹵獲された³⁰⁾。

資料1では、1930年の8月中旬ごろ、蜂起軍は瞻榆とダルハン旗境で活動し、百名余りの規模であったことになる。他方、資料2では、9月下旬ごろの西夾荒、三林站付近で活動する蒙匪の活動の様子が報じられている。この記事の文脈からして、これはガーダー・メイレン蜂起軍のことを指していると思われる。この時点では蜂起軍の規模は3百名余りまで拡大されてと報じられており、

被害を受けたのは西夾荒、三林站付近の漢人であったことが読み取れる³¹⁾。

【資料2】『盛京時報』1930年9月30日、(第7457号)

西夾荒、三林站から6里離れている海沙吐付近では、26日大勢の蒙匪3百名余りが発見された。漢人に対して焼き払いや略奪行為を行い、悪事の限りを尽くしている。27日午前中、東の白興吐屯へ向かい、陳連舉などの小銃を5挺、吳占昇の騾馬20頭余りを略奪し、午後、七段劉家窩に行き、住民の劉某などの6名を殺し、10名余りを傷つけた。蒙匪の至るところでは、人びとが酷く殴られ、殺害されている〔後略〕³²⁾。

なお、『盛京時報』の10月23日の報道では「近来、大山湾、青溝章古台一帯に、長江、青山、泰子、山子などの匪賊約百名が盤踞し、銃と馬が完備しており、憚かるところなく横行している」³³⁾と書かれている。この記事で報道される「青山」はガーダー・メイレンのことを指しているとするなら、同年10月下旬には蜂起軍は、ダルハン旗から離れ、彰武県の北にある青溝章古台一帯で活動していたと考えられる。しかし、この時点で蜂起軍には長江、泰子、山子などの匪賊が加わっており、約100人の規模になっていた。

資料3では、蜂起軍の1930年秋の活動の様子が伝わっており、漢人が蜂起軍に略奪され、殺されたと報道されている。また、西夾荒において、蜂起軍の弾薬を援助する「総機関」が設置されていたことが書かれている。この時点では蜂起軍の規模は数百人を超えている。

【資料3】『盛京時報』1930年11月16日、(第7501号)

西夾荒匪首孟青山、綽名はガーダー・メイレンと呼ばれ、昨年の反開墾の首領である。去年冬、徒党200名余りを集め、ほしいままに略奪し、人民が安心して生活することができていない。今年の秋、防衛軍が関内に入った機会に乗じて³⁴⁾、彼らは活発に行動し、数百人の匪賊と結託し、略奪、殺害を行っている。至るところで、銃と馬を奪い取ることに専念している。西夾荒では「総機関」³⁵⁾が設置され、彼らの弾薬を援助しており、その勢力が盛んで制し切れていない。〔後略〕³⁶⁾。

ここまで、『盛京時報』の記事を参照にしながら、蜂起が勃発してから1930年の秋までの蜂起軍の活動の様子を確認してきた。この間、ガーダー・メイレン蜂起軍は10月下旬ごろ、彰武県の北にある青溝章古台一帯で活動していたことを除いて、主にゲリラ戦の形でダルハン旗新開河側兩岸と西夾荒、遼北荒付近を回りながら展開していたと考えられる。次の節では、『盛京時報』のほかに、『蒙蔵周報』³⁷⁾や、『東三省民報』を参照にしながら、1931年の1月から蜂起が弾圧されるまでの活動について検討していきたい。

2.2. 1931年1月から蜂起が弾圧されるまで

『蒙蔵周報』では、蜂起軍は「匪賊勢力」と位置付けられているが、彼らの攻撃の対象には「窟」³⁸⁾が建てられているところでジャラン³⁹⁾職に就いていたモンゴル人も含まれていた(資料4)。

【資料4】『蒙藏周報』1931年3月31日、(第66号)

ジリム盟ダルハン旗は安定した豊かなところに属していたが、去年の夏から、経済不況の状況に陥っている。時々、匪賊の災難が発生し、過疎の村々に匪賊が出没している。〔中略〕1月29日、馬賊1000名余りが軍人に扮し、旗鼓を備えており、非常に大きな勢力。11日から14日の間、哈喇吐〔地名、ホンゴルオボーの東に位置する村ー引用者注〕の窟を四つ連続で破り、孫家窩棚に向かった。二日間で、また窟を四つ破り、さらに人頼毛都村へ侵攻し、得薄吉〔人名ー引用者注〕ジャランの家に入り込み、彼を拉致した。現在、林毛道を攻撃しており、盛んな勢力で立ち向かうことができない。数少ないモンゴル軍がいるが、実に攻撃能力は皆無である⁴⁰⁾。

当時の内モンゴルのホルチン地域の事情からして、「窟」は地主や牧主などの豊かな人びとの家だけで建てられていた。ジャラン職に就任している人々も一般には勢力のあるモンゴル人だけであつたと考えられる。したがって、当時の「ガーダー・メイレン蜂起軍」がいかに「モンゴル人の土地と利益のために戦う」というスローガンを掲げて立ち上がったとしても、「豊かな人びと」の「窟」を攻撃し、彼らの財産を奪い取ったのは明らかであろう。今日の内モンゴルの一部の人びとの中でも、このような記憶がいまだに残っている⁴¹⁾。

1930年の年末には、ダルハン旗側の旗兵隊が蜂起軍を制圧できなくなったので、東北軍に援軍を求めた。東北軍の総司令官張学良と熱河省政府主席の湯玉麟は、洮南、白城、鄭家屯、通遼、開魯に駐屯する近隣の東北軍を4千人以上の規模で動員し、蜂起軍の弾圧に乗り出した⁴²⁾。

『盛京時報』の報道によれば、1931年の2月、通遼に駐屯する「騎兵三旅団団長の除明晨、公安局長の趙興周、ダルハン旗統領〔軍務メイレンー引用者注〕の劉振玉、興安大隊長の崔錫九は合流し、各自の部隊を率いて匪賊を討伐したとある⁴³⁾。また、洮遼鎮守使の張仙濤は2月11日、自分で騎兵4団を率いて出発し⁴⁴⁾、通遼一帯で匪賊を攻撃したという。その中で、所属第2団の徐雨泉団長は、長い間の激しい戦闘を通じて、数十名の匪賊を殺害し、20名余りを鹵獲した⁴⁵⁾という。同月の21日、張仙濤はダルハン王府からの手紙を受け取り、合同討伐を提案された。彼はしばしば勝利を収めたが、郷村は匪賊の方を援助していることが報道されている⁴⁶⁾。この時の通遼一帯での戦いでは、張仙濤は北側から攻撃し、彰武の第3旅の張旅長も2団の兵力(駐遼源1団、駐通遼1団)を持って南側から迎撃した。康平、法庫、遼源、昌図4県の公安大隊長もその包圍殲滅作戦に加わった⁴⁷⁾。

一方、『東三省民報』(資料5-6)でも、この時のガーダー・メイレンの活動の様子が報じられている。

【資料5】『東三省民報』1931年2月13日、(第2858号)

最近、通遼における匪賊による被害が蔓延している。当県の東、北と西の三面において、匪賊の雙青、莊稼人、紅順、天紅、占東邊などの5人はそれぞれ1、2百人を率いて至るところで騒乱を起こしている。最近また、蒙匪の孟迷喇(名は青山、綽名は托天)のグループ5、6百人と合流し、熱河境に入ったという。駐当県警務処觀察長の崔錫九は、すでに駐当地の陸軍徐団長と共に討伐を行い、また、張鎮守使(仙濤)も討伐に出発したという⁴⁸⁾。

【資料6】『東三省民報』1931年2月23日、(第2867号)

当鎮[大林—引用者注]河北蒙界において、大勢の蒙匪賊が掻き乱している。匪名は平心、紅順と言われ、猖獗を極めていいる。洮南の駐屯軍である張旅2、5両団は通遼に来て討伐した。当鎮の河北一帯で匪賊団と遭遇し、4、5時間の戦闘を通じて、匪賊は敗れ、荒野へ落ちのびた。討伐軍が匪賊を追い詰め、20名あまりの匪賊を捕虜し、30名あまりを殺し、多数の銃と馬を鹵獲した〔後略〕⁴⁹⁾。



図3 ガーダー・メイレン蜂起軍の進軍ルート

注45の記事と史料6の内容から見ると、今回の通遼一帯での戦いは、1931年2月11日、通遼の東北にある、大林鎮の河北一帯（遼河の北側）で、平心、紅順の指導する匪賊団と洮遼鎮守使の張仙濤の所属第2団（団長：徐雨泉）との間で行われたようである。蜂起軍側は20名余りが捕虜にされ、30名余りが殺された（図3）。

ちなみに、紅(洪)順の指導する匪賊団(数十人)は、「ガーダー・メイレン蜂起」が勃発する前の1929年10月下旬ごろに、突泉一帯で活動していたグループである⁵⁰⁾ことが『盛京時報』で報じられている。また、1930年1月上旬ごろ、同匪賊団(2百余名)がこの地域で活動し⁵¹⁾、同年、3月19日、ダルハン旗の泥簾屯及び、古石廟などで瞻榆県に駐屯する陸軍騎兵第3団の第1連と戦ったことが報じられている⁵²⁾。資料5では、「最近、紅順などの匪賊団は蒙匪の孟迷喇[ガーダー・メイレン—引用者注]のグループと合流し、熱河境に入ったと」とされているが、実際に彼らが「ガーダー・メイレ

ン蜂起軍」に加わったのは、おそらく1930年の3月から5月の間であると考えられる。なぜなら、1930年5月21日、「ガーダー・メイレン蜂起」に関して遼寧省側に報告された文書にはじめて彼らが合同で活動する様子が描かれているからである⁵³⁾。

なお、莊稼人(庄家人)などの指導する匪賊団は、1930年11月ごろ、通遼一帯で、同県警務処觀察長の崔錫九の兵隊に追撃された後⁵⁴⁾、1931年1月ごろも同地域で活動していた。同匪賊団は、莊稼人の他に、黒虎、雙青天、紅雲龍、大英字などに指導され、その戦力は200名余りの規模であったようだ⁵⁵⁾。この時点で彼らが「ガーダー・メイレン蜂起軍」と合同で活躍していたかどうかは確認できないが、1931年2月ごろ、「ガーダー・メイレン蜂起軍」に加わったのは確かなことであろう。

『盛京時報』の3月19日の報道では「数日来、通遼などのところから来た大勢の匪賊団約数百名は数グループに分かれ、匪首は老三哥、青山、和字、高山、楽字、老梯字、雙山、三點、振字、明字などが県西北の各村に分散している」⁵⁶⁾と書かれている。また、3月27日の報道では「最近、匪首の疙疸米里[ガーダー・メイレンー引用者注]は大勢の匪賊を率いて開魯から突泉へ逃げた」⁵⁷⁾と書かれている。これらの記事から見ると、蜂起軍3月中旬ごろは、しばらくの間彰武県の西北で活動し、その後開魯県を経て、突泉県境に入ったと考えられる。

しかし、この時点で東北軍に包囲される状況に陥り、やむを得ず、数百名は数グループに分かれて活動するようになった。つまり、4千人以上の兵力を擁する東北軍の弾圧に対して、ガーダー・メイレンはやむを得ず蜂起軍を分散させ、彼の所属部隊はホルチン右翼中旗とジャロト旗の境界にある山岳の要害地で戦闘をしながら、西のバーリン左翼旗、同右翼旗、ウジュムチン旗に回り、苦しい戦局を突破しようとした。蜂起軍は補給を求めて西に向かったが、ホルチン右翼中旗の吐列毛都(トゥレモド)付近で熱河省派遣の李守信軍団に進路を阻まれた。そのため、包囲を突破し、西の林東まで走り抜けた⁵⁸⁾。しかし、彼らはバーリン左旗で越冬していたウジュムチン旗の遊牧民とその騎衛隊に遭遇して衝突し⁵⁹⁾、東のほうに引き返した。長い期間に渡る苦闘を繰り返した蜂起軍は物質や弾薬も欠乏し、次第に窮地に追い込まれていった。

引き返した蜂起軍は、吐列毛都付近では再び李守信軍団の伏兵に遭遇し、まる1日に及ぶ激しい戦闘を行った(資料7)。その戦闘で蜂起軍はひどい損害を受け、包囲を突発できたのはたった40、50名しかいなかったようである。1931年の3月30日、ガーダー・メイレンは残りの40、50人あまりの兵士を率いて、吐列毛都から魯北県を経て、ダルハン旗に戻ってきたが、ホンゴルオボー(洪格爾敖包)付近で、行先をウルジームレン河(新開河)に阻まれ、追ってきた李守信に包囲された⁶⁰⁾。それはちょうど凍りついた河が解け始める頃であり、20人ぐらいの兵士が河を渡ったが、ガーダー・メイレンはそこで戦死した。

資料7と資料8では、ガーダー・メイレン蜂起軍が弾圧される際の様子が伝えられている。

【資料7】『盛京時報』1931年4月5日、(第7628号)

当県防衛軍17旅長の崔星五は命令を受け、27、34の両団の兵士を率いて蒙匪を討伐するために出発した。現在は魯北、天山、林東などの地域の匪賊への討伐が終わり、匪首の孟梅倫が逃亡し、行方不明となっている。〔中略〕当匪賊団は皆モンゴル人で、地理に詳しいため、包囲しにくい状況。その直前、開魯から500里離れたところで当匪賊団に遭遇し、約1日間の激戦を通じ

て、蒙匪が破れてちりぢりばらばらになった。今回の討伐では数百頭の馬を鹵獲し、80名余りの匪賊を殺し、53名を捕虜にし、5名の人質を殺した〔後略〕⁶¹⁾。

資料7で書かれている「開魯から500里離れたところ」とは、ホルチン右翼中旗の吐列毛都付近の地域を指していると考えられる。李守信自身の回想記によれば、今回の戦闘では、蜂起軍の規模は1000人余りであり、2、3百人が捕虜にされるか、殺された⁶²⁾と書かれているが、実際にも、少なく見積もっても約50人から80人規模の蜂起軍が殺されたとみられていた。また、資料7では蜂起軍に参加した兵士全員がモンゴル人であったと記述されている。

資料8の下線部では、匪首(ガーダー・メイレン)は権勢のある人であって、西夾荒の開墾により、彼自身の土地(tariy-a/農耕地)が争いに巻き込まれ、逮捕されるが、脱獄し、民衆を集めて匪賊になったと書かれている。また、副首領の陳剛、洪順等の人物像も紹介され、「これらの匪賊が最初は約千人余りの民衆を集め、かなりの政治的意味を持ち、魯北縣と東西ジャロート旗内で活動していた」という。

【資料8】『蒙蔵旬刊』1931年9月20日(創刊號)

去年の冬、駐熱河東北陸軍独立旅の崔新五の部下は魯北に来て討伐し、数回の接触を通じて、40、50人の匪賊を射殺したが、まだ徹底的に肅清できなかった。崔の部下李守信団長の大隊長である胡宝山、李明遠とその兵士の大半は皆モンゴル人であるため、モンゴルで作戦するには役に立った。当匪賊の首領は孟氏で、ガーダー・メイレンとも呼ばれ、元々はダルハン旗の兵隊統領であって、かなりの権勢を持っていた。遼寧省による西夾荒の開墾で彼の農地の大半が巻き込まれたので、それに反対した疑いで逮捕され、脱獄後、民衆を集めて匪賊になった。今回の戦いで殺されたと言われているが、まだ明確ではない。副首領は陳剛、洪順等という。陳は林東のモンゴル人で、かなりの財産を持っていて、かつて警察官を勤めたことがあったが、事件に巻き込まれ、財産を没収され、追い詰められて無謀なことをした。当匪賊団は、最初はかなりの政治的な意味を持っており、1000人あまりの人を組織し、魯北県、東西ジャロート旗境内で一年あまり盤距し、過酷な騒乱を起こした。〔後略〕⁶³⁾。

ここまでの内容をまとめて見ると、蜂起軍の進軍ルートは以下の通りである(図3)。

ダルハン王府の印務処牢屋から脱獄、武装蜂起開始(1929年12月13日)→ダルハン旗の西夾荒、遼北荒付近(1930年4月～1931年2月)→彰武県(1931年3月中旬)→開魯県→ホルチン右翼中旗の土列毛都(1931年3月下旬)→バーリン左旗(林東)→ホルチン右翼中旗の土列毛都→魯北(1931年3月下旬)→ホゴルオボー(ガーダー・メイレン戦死、1931年3月30日)。

蜂起軍の主なメンバーについては、不明な点が多い⁶⁴⁾。上で取り上げた新聞記事には、副首領の陳剛、洪順(紅順)以外に、天紅、高山、満天紅、三哥、和字、楽字、老梯字、雙山、三點、振字、明字、雙青、平心、莊稼人(庄家人)、占東邊などの匪賊の名が登場している。この中では、洪順(紅順)は、モンゴル人であると言われており、文学作品などにもしばしば登場する人物であるが、他の匪賊の詳細については現時点では不明である。

ガーダー・メイレン蜂起は失敗した。しかし、その出来事は遼北荒と西夾荒の開墾作業を大幅に遅らせ⁶⁵⁾、半年後、「満州事変」を契機にホルチン左翼中旗を含む東北三省が満州国に編入されたので、蒙地開墾は中止された。約1年3ヶ月の期間に、蜂起軍はホルチン左翼中旗から、ホルチン左翼後旗、彰武県、ジャロート旗、開魯県、ホルチン右翼中旗、パーリン左旗まで展開していた。本稿で見てきたように、この出来事は、蒙地開墾を推し進める側である遼寧省に報告された文書においてだけでなく、『盛京時報』、『東三省民報』、『蒙蔵周報』、『蒙蔵旬刊』などの新聞でも報じられていた。

おわりに

本稿では、奉天で出版された『盛京時報』、『東三省民報』などの新聞を用いて、「ガーダー・メイレン蜂起軍」の活動や戦闘、移動ルートについて検討した。本稿で明らかになったことは以下の通りである。

まず、蜂起が勃発してから、1930年秋まで、10月下旬ごろ、一回、彰武県の北にある青溝章古台一帯で活動していたことを除いて、主にゲリラ戦の形でダルハン旗新開河側両岸と西夾荒、遼北荒付近を回りながら展開した。

次に、『盛京時報』の報道によれば、蜂起軍の攻撃の対象が地元の漢人であったことが確認できる。もし、これが事実だとするなら、『嘎達梅林の事迹』、『民族英雄嘎達梅林的歴史材料彙編』などの伝記や資料で記述されている内容とは齟齬がある。

一方、伝記で記述されている、蜂起軍の活動に地元の漢人匪賊団が加わったことは『蒙蔵周報』と『東三省民報』で報じられており、それはかなり信憑性があると考えられる。彼らの掲げたスローガンに留意したい。蜂起軍が遼寧省側から派遣されてきた遼北荒と西夾荒地域の開墾軍を攻撃したとき、「民衆の財産を奪い取ってはいけない」というスローガンを掲げていた。そのような倫理は、同時に匪賊団のメンバーに対しても要求していたかもしれない。もっとも、さまざまな種類の伝記などに表われているように、一部の人々が蜂起軍の名義で地元の漢人とモンゴル人地主に対して、略奪行為を行ったという事件も存在した。また、当時のホルチン左翼中旗の蒙地開墾の事情や、資料8の記述から見ると、ガーダー・メイレンは単なる「蒙地開墾に対抗し、モンゴル遊牧民のために戦った」⁶⁶⁾と指摘されるのは、適当ではないと思われる。

これまで見てきたように、もともとの蜂起の契機は「開墾反対運動」であったとしても、途中で加わった「匪賊団」のことを考えると、蜂起軍の内実は変わって行ったのではないだろうか。当時の東北地域の状況から見れば、外モンゴルは清朝の崩壊と中国の辛亥革命の動乱に乗じて、独立を宣言した。中華民国が建国されたが、実際には軍閥により分割された状態になった。このような背景で、東北地域に「満州の馬賊」とも呼ばれような「匪賊団」が多く見られるようになった。ガーダー・メイレン蜂起が勃発した後、後方からの援助が少なかったため、匪賊団と連携する方法しかなかったと思われる。これについては、地元のモンゴル人も同様の指摘を行っている⁶⁷⁾。

最後に、ガーダー・メイレンの活動、とりわけ、彼らが奉天で行った「反開墾運動」については、現時点で参考にできる文献資料が見つからなかった。また、本稿では蜂起軍の動きや移動ルートに

ついてある程度検討したが、入手した史料上の制限により、彼らがなぜそのようなルートを通ったのかという問題について詳しく検討することができなかった。これらの問題を含めて、現地での档案調査やフィールド調査を行いながら、さらに研究を進めることを今後の課題としたい。

〔注〕

- 1) 「ガーダー・メイレン」のカタカナ表記については、先行研究では「ガダ・メーリン」、「ガーダー・メーリン」、「ガーダー・メーレン」、「ガーダー・メイリン」などの異なる形で表記されているが、本稿ではモンゴル語と満州語の発音に従って、「ガーダー・メイレン」と表記する。
- 2) 拙稿(包宝海 2015 : 303)。
- 3) ボルジギン・ブレンサイン(2003 : 142)、なお、先行研究や各資料の記述ではガーダー・メイレンの活動について、旧暦、西暦、民国暦で記述されている場合もあるが、本稿では、西暦で記述した。
- 4) 石原邦子(2002 : 24-25)。
- 5) Kürelša, Sergüleg(1999 : 167)、なお、蜂起軍の内実については、史料によって「蜂起軍」、「匪賊団」、「蒙匪」、「胡匪」などの形で記されている場合もあるが、本稿では一貫して、「蜂起軍」、あるいは「ガーダー・メイレン蜂起軍」と記す。しかし、引用史料によって「匪賊」、「匪賊団」などの言葉も用いる。
- 6) 波・特古斯、王坤(1983 : 17)。
- 7) 「民族英雄嘎達梅林の歴史材料彙編」(1960 : 16)。
- 8) 特古斯巴雅爾(1994 : 36)。
- 9) ボルジギン・ブレンサイン(2003 : 127)。
- 10) 石原邦子(2002 : 25)。
- 11) ボルジギン・ブレンサイン2003 : 36。
- 12) 特古斯巴雅爾(1994 : 30)。
- 13) ホルチン左翼中旗の歴代の蒙地開墾は1851年から1929年までの期間に行われた開墾作業を指す。これについては、ボルジギン・ブレンサイン(2003 : 40-62)に詳しい。
- 14) 趙海山(2003 : 76)。
- 15) ボルジギン・ブレンサイン(2003 : 89)。
- 16) ボルジギン・ブレンサイン(2003 : 90)。
- 17) ボルジギン・ブレンサイン(2003 : 144)。
- 18) Kürelša, Sergüleg(1999 : 121)。
- 19) ボルジギン・ブレンサイン(2003 : 145)。
- 20) これについては、当事者であるセレンゲーによる回想記「嘎達梅林越獄的經過」に詳しく書かれている(劉忱2004 : 145-153)。
- 21) 石原邦子(2002 : 23)。
- 22) 波・特古斯、王坤(1983 : 19)。
- 23) これは『内蒙古日報』(モンゴル語版)2007年7月6日に掲載された「測量局を打倒し、民衆の財産を奪い取ってはいけない」という蜂起軍のスローガンで、ガーダー・メイレン本人によるサインであると言われているが、研究者によって疑問や批判もなされている(S.Urusqal 2009 : 80-81)。
- 24) Kürelša, Sergüleg(1999 : 162-166)。
- 25) 同上、p.166。
- 26) 図2では表示されていないが、現在の「白興吐」の北、「ジャムト」の西に位置する「煙灯吐」のことを指していると思われる。
- 27) 「遼寧県長王激波呈文」民国19(1930)年5月21日、科爾沁左翼中旗档案馆「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号80。
- 28) 「遼寧県長金玉聲密稟呈文」1930年5月16日、科爾沁左翼中旗档案馆「史志辦档案史料」-「沿革地理類」

- 類号120;「丈放東西夾荒事務局総辦劉琨呈文」民国19年8月、科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号138。
- 29) ここで挙げられている「洪順」という人物は、蜂起軍に加わっていた「匪賊団」のリーダーの一人であり、資料によって「紅順」と書かれている場合もあるが、同じ人物を指していると思われる。
 - 30) 「劉団長剿匪獲勝」『盛京時報』1930年8月12日、(第7408号)、第76冊、697頁。下線は引用者によるものであり、[]の内容は省略したことを示している、以下は同じ。
 - 31) 西夾荒付近での漢人が蜂起軍によって殺されたことは、次の記事でも報じられている。「西夾荒は辺びなところに位置し、ずいぶん昔から匪賊の出没が通常は余りない地域で、産額は遼源全県で一番多かった。去年の夏と秋頃から蒙匪の孟青山は徒党数百名を率いて躍起になって略奪行為を行い、漢人を殺し、人民の生活のよりどころが奪われた〔後略〕」(「西夾荒蒙匪猖獗」『盛京時報』1931年2月22日、(第7589号)、第78冊、283頁)。
 - 32) 「發現大股蒙匪」『盛京時報』1930年9月30日、(第7457号)、第77冊、174頁。なお、同新聞の9月27日の報道では、9月26日に、騎兵第5団長の劉茂儀は所属の第14中隊を率いて、瞻榆一帯で紅順などの匪賊団を攻撃したことが報じられている(「劉団長率隊剿匪」『盛京時報』1930年9月27日、(第7450号)、第77冊、154頁)。
 - 33) 「匪勢披猖」『盛京時報』1930年10月23日、(第7478号)、第77冊、309頁。
 - 34) 原文では「今秋乘防軍開撥入關之際」と書かれている。
 - 35) 原文では「在西夾荒設有總機關、接濟槍彈」と書かれている。
 - 36) 「蒙匪機關尚存」『盛京時報』1930年11月16日、(第7501号)、第77冊、445頁。この史料では、「今年の秋」と書かれているが、文脈からすれば、1930年の11月ごろのことを指していると推察される。
 - 37) 『蒙藏周報』は1929年9月、中国国民政府の蒙藏委員会によって南京で刊行された週刊誌である。「三民主義」を宗旨に、モンゴルとチベットは中華民族の一部であることをアピールしながら、その歴史的地位などを強調していた。当新聞では、当時の国内外における重大なニュースや、モンゴルとチベットの社会情勢などが報道されていた。
 - 38) 「窑(yao)」という言葉が辞書の中では「瓦や陶磁器を焼く窯」と解釈されているが、劉忱(2004: 90)によれば、「窑」とは、周りに砲台が建てられた住宅(大院)を指しており、「响窑(xiangyao)」ともいう。
 - 39) 参領、官名を指している。
 - 40) 『蒙藏周報』(第66号)1931年3月31日、この資料については、義都合西格、額爾德木図、吳津(1960: 26)を参照、また、この資料の内容はKürelša, Sergüleng(1999: 175-176)でも引用されている。
 - 41) これについては、拙稿(包宝海 2016掲載予定)にくわしい。
 - 42) ボルジギン・ブレンサイン(2003: 145)。
 - 43) 「聯合勦匪」『盛京時報』1931年2月10日、(第7580号)、第78冊、232頁。
 - 44) 「張鎮帥出發」『盛京時報』1931年2月14日、(第7584号)、第78冊、258頁。
 - 45) 「張鎮帥勦匪捷音」『盛京時報』1931年3月5日、(第7600号)、第78冊、354頁。
 - 46) 「達爾罕王府電請張鎮帥會同勦匪」『盛京時報』1931年2月26日、(第7593号)、第78冊、310頁。
 - 47) 「軍警雲集搜勦胡匪」『盛京時報』1931年2月21日、(第7588号)、第78冊、276頁。
 - 48) 「通遼股匪 已聯合五六百人 軍隊正謀會勦」『東三省民報』1931年2月13日、(第2858号)。なお、ここで登場する莊稼人という人物と『盛京時報』で登場する「庄家人」は同じ人物を指していると思われる。
 - 49) 「匪患肅靖 擊斃三十餘名 活捉二十餘名」『東三省民報』1931年2月23日、(第2867号)。
 - 50) 「調隊勦匪」『盛京時報』1929年10月25日、(第7135号)、第74冊、360頁。
 - 51) 「傳団長勦匪凱旋」『盛京時報』1930年1月10日、(第7204号)、第75冊、47頁。
 - 52) 「防軍勦匪凱旋」『盛京時報』1930年4月3日、(第7281号)、第75冊、518頁。
 - 53) 「通遼県長王激波呈文」1930年5月21日、科爾沁左翼中旗档案館「史志辦档案史料」-「沿革地理類」類号80; ボルジギン・ブレンサイン(2003: 147)。
 - 54) 「大隊長剿匪凱旋」『盛京時報』1930年11月8日、(第7494号)、第77冊、402頁。

- 55) 「大隊長剿匪捷音」『盛京時報』1931年1月17日、(第7556号)、第78冊、87頁。
- 56) 「鬍匪讎起」『盛京時報』1931年3月19日、(第7612号)、第78冊、426頁。
- 57) 「張局長防患未然」『盛京時報』1931年3月27日、(第7620号)、第78冊、477頁。
- 58) 石原邦子(2002: 23)。
- 59) Kürelša, Sergüleg (1999: 178)によれば、当時の諸モンゴル旗の間でのやり取りや情報交換は少なかったことにより、両側がお互いの区別をはっきりさせなかったため、衝突してしまったという。
- 60) 李守信(1983: 55)。
- 61) 「勦討蒙匪軍凱旋 擊斃百名活獲五十」『盛京時報』1931年4月5日、(第7628号)、第78冊、531頁。また、同新聞の4月9日の記事でもこの時の様子が報じられている(「崔司令又出剿匪」『盛京時報』1931年4月9日、(第7631号)、第78冊、548頁)。
- 62) 李守信(1983: 55)。
- 63) 「魯北縣境匪患已平」『蒙藏旬刊』1931年9月20日(創刊號)、137頁。また、『蒙藏週報』の第76号(1931年7月21日)では「達旗殲滅巨匪」という見出しで蜂起軍が弾圧される時の様子が報じられている。
- 64) 義都合西格、額爾德木図、吳津(1960)、Kürelša, Sergüleg (1999)などの伝記によれば、蜂起軍には、紅順、高山の他に、中国、庄五団、庄五營、玉山、天龍、黒塔などの匪賊団が加わっていた。
- 65) ボルジギン・ブレンサイン(2003: 145-146)。
- 66) 特古斯巴雅爾(1994: 36)。
- 67) これについては、拙稿(包宝海 2016掲載予定)にくわしい。

【参考文献】

【雑誌論文・著作】

- 石原邦子「内モンゴル民歌「ガダ・メーリン」に関する一考察——モンゴルの英雄はなぜ中国で歌われたか」『モンゴル研究』第20号、2002年
- 特古斯巴雅爾「ガダ・メーリン」——モンゴル開墾抵抗運動の英雄——『日本とモンゴル』第88号、1994年
- 包宝海「中国・内モンゴルにおけるガーダー・メイレンの記憶とその変遷」『クアドランテ』第17号、2015年
- 包宝海「草の根社会におけるガーダー・メイレンの記憶と語り」『言語・地域文化』第22号、2016年(掲載予定)
- ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』風間書房、2003年
- 白拉都格其、金海、賽航『蒙古民族通史』第五卷(上)、内蒙古大学出版社、2002年
- 曹永年『内蒙古通史』内蒙古大学出版社、2007年
- 郝维民『内蒙古革命史』人民出版社、2009年
- S.Urusqal, “Γada meyiren-ü amidaral üile-dü qolboydaqu kedün asayudal”, *Öbör Mongγol-un yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ü sedkül(gün uqayan neigem-ün sinjilekü uqayan-u mongγol keblel)*, 2009 on-u 2 duyar quyuçay-a.

【伝記、地方志】

- Kürelša, Sergüleg, *Qorčin arad-un dayuu-yin bayatur-un domoy namtar*, *Öbör Mongγol-un soyol-un keblel-ün qoriy-a*, 1999 on.
- 劉忱『嘎達梅林』远方出版社、2004年
- 義都合西格、額爾德木図、吳津『嘎達梅林的事迹』内蒙古人民出版社、1960年
- 趙海山主編『科爾沁左翼中旗志』内蒙古文化出版社、2003年

【漢語資(史)料】

- ① 〈国際日本文化研究センター蔵〉
『東三省民報』民国20(1931)年2月13日、(第2858号)
『東三省民報』民国20(1931)年2月23日、(第2867号)
- ② 〈東京大学東洋文化研究所蔵〉

『盛京時報』(影印本) 民國18(1929)年10月25日-民國20(1931)年4月9日(第7135-7631号)、第74-78冊

〈科爾沁左翼中旗檔案館藏〉

「民族英雄嘎達梅林的歷史材料彙編」科爾沁左翼中旗檔案館、1960年7月7日

「通遼縣縣長王激波呈文」1930年5月21日、科爾沁左翼中旗檔案館「史志辦檔案史料」-「沿革地理類」類号80。

「遼源縣縣長金玉聲密稟呈文」1930年5月16日、科爾沁左翼中旗檔案館「史志辦檔案史料」-「沿革地理類」類号120

「丈放東西夾荒事務局總辦劉劭琨呈文」民國19年8月、科爾沁左翼中旗檔案館「史志辦檔案史料」-「沿革地理類」類号138

③ 〈東京外國語大學附屬圖書館藏〉

波·特古斯、王坤「嘎達梅林起義軼事」『內蒙古文史史料』第十輯、內蒙古人民出版社、1983年

李守信「我是怎樣鎮壓嘎達梅林起義部隊的」『內蒙古文史史料』第十輯、內蒙古人民出版社、1983年

『蒙藏旬刊』(創刊號)1931年9月20日：『中國少數民族舊期刊集成、第1版』、南京卷、2006年